

《翻訳》

ネパールのアンタッチャブル（一）

インセック

（『人権年鑑』一九九三）

桐村 彰 郎（訳）

（訳者解説）

ここに訳出するのは、ネパールのカトマンドゥにある人権NGO・インセック（INSEC: Informal Sector Service Centre）が発行した『人権年鑑』一九九三年版に、付録として掲載された「ネパールのアンタッチャブル」（“Highlight of the Year Untouchables in Nepal”）である。

本論考は、一九九〇年の民主化運動によって多党制民主主義が発達した時点で発表されたもので、それ以前の旧習がまだまだ色濃く存在していた時期である。その後、国際的な支援とネパールの人権NGOや政府の努力によって、現在、アンタッチャブルの状況は当時よりいくらかは改善されているものと信じるが、いまだにさまざまな差別の実態が報告されていることも事実である。近年の諸差別の実態については、拙稿「ネパールのアンタッチャブル」（沖浦和光ほか編『アジアの身分制と差別』所収、解放出版社、二〇〇四年）や「ネパールにおけるダリット差別」

『奈良法学会雑誌』第一九卷三・四号、二〇〇七年三月）などを参照されたい。

本稿は、これまで不詳であったアンタツチャブルのサブカテゴリーをはじめ、各地域の慣習、実態が明らかにされていて、非常に興味深いものがある。日本でネパールに関心をもつ人々が、この時点と現時点の状況を比較検討するために、本論考を訳出することは、有益ではないか、と考えている。なお、今日からみて、不正確な叙述と思われる叙述も一部にないではないが、この点補正を加えることはしていない。また現地語を英語表記に転換する過程でいくつかの不統一もみられるが、この点も無理に統一をはかることなくそのままにしている。

翻訳にあたっては、インセツクの承諾を得た。

なお、便宜のため、目次一覧は訳者が付け加えた。

目次一覧

カーストに基づくアンタチャビリテイとはなにか

アンタツチャビリテイのシステム…起源

階級制度とアンタツチャビリテイ

アンタツチャブルとは誰か？

(a) 装飾品、武器、陶器類を作る仕事や他の労働技能に従事するコミュニティ

(b) 布を織ったり地域の音楽楽器を弾いたりする仕事に従事するコミュニティ

(c) 皮革業のコミュニティ

(d) 歌うジブシーのコミュニティ

(e) バデイ・コミュニティ

(f) クマル・コミュニティ

(g) 洗濯職に関するコミュニティ…ドービ

(h) テライ (マデシユ) のアンタッチャブル

(i) ネットワール・コミュニティ内のアンタッチャブル

ネパールのカーストにもとづくアンタッチャビリテイの状況

辺鄙な西部地域

ハリヤ (耕作男たちの) システム

ドリ (担ぎかご) システム

ジャリ (姦通) システム

ダン・カーネ / チャングラ (持参金) システム (以上本号)

中西部地域

西部地域

中央地域

東部地域

カーストに基づくアンタッチャビリテイに対する宗教的諸コミュニティ、政府および政党の態度

ネパールにおけるカースト解放のためのアンタッチャブルのイニシアティヴ

カースト・アンタッチャビリテイの廃止のための勧告

カーストに基づくアンタチャピリテイとはなにか

インドやネパールやその近隣諸国のいくつかでは、カースト分裂およびアンタチャピリテイが、何世紀も存在し、なお社会に影響を与えている。このようなシステムは、世界の他のどんな国々でも支配的ではないし、今は存在もしていない。このシステムが支配的なインドやネパールのような国に住んでいる人びとは、何千年の間、多くの社会的差別や憎悪や屈辱を経験しなければならない。それゆえ、これらの国々でのこの社会的慣行は人類にたいする侮辱なのだ。

最初はカースト分裂は存在しなかった。この事実は、古典の聖典や歴史的証拠についての徹底的分析から明らかになっている。インド亜大陸において、原初のコミュニティは「カースト・システム」(カースト分裂やアンタチャピリテイを含む)をもたなかった。この点でも、このシステムは後にできあがったのだ。これに関してマハビラート Mahabharat すなわち有名なヒンドゥ教の聖典はつぎのように言っている。

「原住民はカーストや世襲的地位において平等であった。すなわち人びとの間には不平等や差別はなかった。」
(シャンティパルヴァ Shantiparva 107/30)

初期のコミュニティにはカースト・システムはなかった。それは後になって存在するようになったのだ。そのことは、バールミキ・ラマヤン Balmiki Ramayan のなかで次のように述べられている。

「トゥレタ・ユグ(時代)がサッチャ・ユグにつづいた。そして強力なクシャトリアはブラーマンと同様にそこ

で苦行を行い始めた。その時、マヌと他の賢人たちはブラーマンとクシャトリアのあいだに相違を認めず四つの階級からなるコミュニティを設立した。」(ウツタルカンド Utkand 74/11-15)

ヴェーダの時代においてはアーリヤ人はブラーマンとクシャトリアとヴァイシヤに分類されていなかった。これらの階級はリグヴェーダの第一期にあらわれた。その後の時期にシュードラが作られたが、しかし彼らは無視されてはいない。

「カースト・システムは、リング・プラナ Ling Purana が述べているように、最初南インドではじまった。(プアルダ Purvardha 89/95)」

ヒンドゥ教よりも早くにヴェーダ信仰が存在した。ヴェーダのコミュニティのなかでアーリヤ人によって吟唱される歌や聖歌から、当時のコミュニティの人達が平等でありそしてカースト差別は存在しなかったという事は明らかである。(リグヴェーダ 10/191/3-4)

カーストは生まれつきのものではない。初期においてそれは人の行う仕事の性質によって決められていた。リグヴェーダの第一〇マンダラのおわりごろに四つのカーストが明らかに述べられている。

「巨人がその口と手と太ももと足をもっていて、そしてそれぞれにブラーマンとクシャトリアとヴァイシヤとシュードラを」(リグヴェーダ 10/90/12)

第一〇マンダラの聖歌は紀元前一五〇〇〜一〇〇〇年の間につくられたと思われる。その示唆するところでは、ヴェーダ期のある人びとの間で、労働の四つの型にもとづいて社会を四階級に分割することがはじまった。紀元前一二〇〇年頃と考えられる。この階級とは以下のものであった。

一・ブラーマン。礼拝、知識、教育などのような知的活動に従事(知的ならびに宗教的分野)

二、クシャトリヤ。軍事、統治および農業に従事（政治分野）

三、ヴァイシヤ。牧畜、農業およびビジネス（経済分野）

四、シュードラ。重労働、職人仕事およびサービス（労働分野）

リグヴェーダにはこうした四階級のほかに、ヴェーダ後期にあらわれた他のカーストや、アンタッチャピリテイ・システムの言及はない。

「ヴァルナ」（階級）という言葉はもともと色を意味するが、のちにその原初的意味を失い、労働の分裂「分業」をあらわすようになった。ヒンドウ・イデオロギーによれば、「ヴァルナ」と「ジャート」（カースト）はいまや同義的となつている。アーリヤ人と非アーリヤ人は、リグヴェーダにおいて区別されるようになったとみえるが、ここでは非アーリヤ人は、「ダス」Das あるいは「ダシュ」Dasyu（召使）として言及されている。そのことは、古代の時期に「ヴァルナ」という言葉はアーリヤ人と非アーリヤ人を区別するために使われたということを示唆している。インド亜大陸のコミユニテイはアーリヤ人、モンゴル人、ドラヴィダ人、シイティアン Sinitian の先祖の集合体であった。ジャーテイとヴァルナはお互いに顔をつきあわせる隣人のようなものである。まず第一に、ブラーマンがカーストに転換した。それゆえ、ジャーテイもまたヴァルナとして扱われうるのである。最初は、上述の四階級は少数のヴェーダ期の人々についてのみ見出されたが、個人ひとりとしては、さまざまな機会にいろいろな仕事をする事ができた。仕事にとって必要な適格性を獲得してのち、ヴァイシヤやシュードラは、尊敬をうける上層カーストのために仕事をする事ができた。この点について、マハバラートはいつている。

「シュードラ階級に生まれた人でも、ある階級にふさわしい徳と能力を獲得する場合には、ヴァイシヤやクシャトリヤやブラーマンになることができる。」（ヴァンパルヴァ Vanparva 211/11-12）

初期には、ブラーマ・プーラン *Brahma Puran* に述べられているように、四階級すべての男女はヴェーダを唱えたり「ヨーギヤ」をおこなったりする適性があると考えられていた。

「シュードラさへも、ヴェーダや他の聖典を研究し、またよき文化的行為をもてば、ブラーマンや他の上位階級に昇ることができる。もしその行為が望ましいものでないのなら、ブラーマンもまたシュードラの地位にふさわしいものでありうる。」(ブラーマ・プーラン、223/53-54)

この状況はバガヴァット・ギータ *Bhagavat Geeta* でロード・クリシュナによって次のように述べられている。「我は人間の質と行為にもとづいて四つの階級を創造した。」

古代の聖典がシュードラあるいは下位に生まれたひとびとの实例に富んでおり、昇格せしめられた家族を上品ぶつた賢人、ブラーマンなどとして非難したのは、このルールによるのである。バジラスーチ・ウパニシャッドによれば、プーランのなかで評価されている賢人のなかで、パラサール *Parasar*、バシシタ *Bashista*、ヴィスワミトラ *Viswanitra*、バルドワジ *Bhardwaj* およびナラタ *Narada* はそれぞれ人殺し、売春婦、クシャトリア、シュードラおよび召使の母から生まれ、しかもなおかれらは上層階級に昇つたのである。マタンガ *Matanga* は人殺しであったが、苦行の修練をつうじて賢人の地位に到達した。初期には、カースト・システムはインド亜大陸に移住したアーリヤ人種のすべてのセクションにおいて平等に思われた。ヴィデア *Videha*、シャッキヤ *Shakya*、コリヤ *Kolira*、リッチャヴィ *Licchavi*、マッラ *Malla* および他のアーリヤ人コミュニティはすべてクシャトリアだけと考えられた。そして他の四階級には言及がない。

ビムラオ・アンベドカル博士によれば、シュードラの起源には二つの原因がある。第一にそれは王とブラーマンとの抗争の結果である。第二にそれはまた仏教徒とブラーマンとのあいだの闘いの結果でもあり、その闘いで、

(アーリヤ人に敵対する)非アーリヤ人がアーリヤ人に打倒され、リグヴェーダに述べられているように、前者が「シュードラ」と呼ばれたのである。後になって追加されたリグヴェーダの「プルシユ・シユークタ」*“Purush Sookta”*を除けば、シュードラについての言及はない。ヴェーダ期の人びとがシュードラに召使の地位を割り当て始めたとき、アーリヤ人はシュードラの職業を捨て始めた。後に、非アーリヤ人の貧しい労働者や戦争捕虜がシュードラあるいは奴隷に転換されたとみられる。

シュードラが採用した職業は、徐々に奴隷の水準へと落ち込み、そして非アーリヤ人の戦争捕虜がそこに収容された。シュードラはブラーマンやクシャトリヤやほかのものが採用した職業を選ぶのをやめた。シュードラの仕事、鉄や皮革や粘土や道路や下水の清掃、屠畜、葬式の場での給仕などもまた憎悪と軽視の念でみられた。徐々にシュードラは階級搾取と不正の犠牲となった。かれらがその仕事を捨て、他の階級の職業を選ぶことを禁止するという制限が課された。もし誰かが制限を犯したならば、彼・彼女は厳しく処罰されたであろう。

マヌ法典(10/43-45)では、四つの階級を除くすべてのカーストはマヌによってシュードラのもとにグループ化されている。

アンタツチャビリテイのシステム…起源

リグヴェーダはチャルマムナ(すなわち「チャマール」=靴職人)に言及しており、そしてヴァジャスネミ・サミタ *Vajasnemi Samhita* は「チャンダール」や「パウラカ」というような言葉を使っている。他方、ドビニ法典 *Dhobini Smriti* は「ラジャク」に言及し、チャンドーギヤ・ウパニシャッドは「チャンダール」に言及している。

しかしながらこの階級の人々がアンタツチャブルだったという言及はどこにもない。法典の引用句には、アンタツ

チャビリテイの状況への言及が見出されうる。上層支配階級の人々は次第に、彼らの優越性を示し、社会におけるかれらの支配を確立するためにシユードラを抑圧しつづけた。後になって、彼らが好まなかった、あるいは忌まわしい仕事をするよう強要したシユードラがさらに劣った地位に押し下げられ、社会的アウトカーストとして追放され、アンタッチャブルとして扱われた。その結果、二つのタイプのシユードラがあらわれた。

一・主人のために働くその家に定住するタッチャブル・シユードラ

二・社会的アウト・カーストとして生活するアンタッチャブル・シユードラ

ヴィシユヌ・プーラン Vishnu Puran の次の聖歌はこの状況を論じている。

「その生命、財産、そして妻をブラーマンの奉仕に捧げるシユードラの触れた穀物や他の品目は食べることができない。しかし他のシユードラによるものは食べることではない。」

シユードラの父と、ブラーマンやクシャトリアやヴァイシャの母とから生まれた子供は、アーヨーガヴァ Ayyogava、クシャットラ Kshatra そしてチャンダール Chandāl のような下層カーストと判断され、社会から追放され、アンタッチャブルとみなされた。

ヴァヤス法典 Vyas Smriti は、以下のカーストや職業の人々をアンタッチャブルのカテゴリーに入れている。

「ビジネスマン、キラント、カヤスタ、マリ、竹職人、ベラート、カンジャール (犬を食べる)、チャンダール、ダス、メッタール (掃除人)、コラークそして牛肉を食べるすべてのカーストは低い生まれである。彼らと話をするとという罪は、沐浴によって浄化される。彼らを見るという罪は、太陽を見ることによって浄化されうる。」(111-12)

それによれば、ヴァイシャとキランタ (モンゴル人種) もまたアンタッチャブル階級に置かれている。しかしな

から、彼らは、初期においても、後になつてもアンタツチャブルのように扱われていない。

法典はまた、同じ「ゴートラ」"Gotra" (出自)、すなわち血縁関係を持っている両親から生まれた子供も社会的に追放され、チャンダールのアンタツチャブルとして非難される、と述べている。邪悪な行いをする罪人もまた社会的アウトカーストおよびアンタツチャブルとして扱われた。マヌ法典によれば、ブデイスト、パシユバート、ジャイン、ロカヤート、カピルあるいはサンキヤの信者達、非宗教的ブラーマン、シャイヴァ、無神論者もまた、ブラーマ・プーランのなかでアンタツチャブルとして数えられた。

もし人が特殊な条件のもとにとどまるならば、彼・彼女はアンタツチャブルとしてあつかわれる。たとえば、家族内の人の死による不浄、子供を出産し、あるいは月の巡りを持つ女性、あるいはかれらに触れそして沐浴によって自らを浄化しなかつた人々はまたアンタツチャブルとみなされる。すべての非ヒンドウ教徒もアンタツチャブルとみなされる。

すべてのアンタツチャブル・カーストのなかでチャンダールは最も哀れむべき条件を持つ。アンタツチャブルとみなされるほかに、彼らの触れた空気さえも穢れたのである(ジャタク Jatak)。アプスタンヴァ・ダルマシユートラ *Apstanva Dharmasootra* によれば、チャンダールはアンタツチャブルで、眺められたり、見られたりすべきではない。マヌ法典は、チャンダールやメタル *Mehars* (ポデヤチャマル) に関する規定を含むが、それによれば、彼らは町あるいは村の外に住み、粘土ポットだけを使い、葬式場で死体を焼き、死刑判決をうけた人々を殺し、この人々のベッドと装身具を使い、他のいやでたまらないことをすべきである。(10/51-56)

世界史を一瞥すると、生まれや職業にもとづくカースト制度が、ギリシヤやペルシヤやローマや中国や日本や他の国々でも存在したことはあきらかである。しかしながら、われわれのコミュニティに見られるようなカースト差

別やアンタチャビリテイはなかった。今日でさえも、非白人、特に黒人は、しばしばヨーロッパやアメリカでは嫌悪や憎悪をもつて見られている。しかしこの態度はアンタチャビリテイの水準にまではいたっていない。

インド亜大陸には世界からさまざまなカーストや部族が移住してきた。この移民の混合は、カースト差別やアンタッチャビリテイのような望ましくない状況を生み出したが、それは後に極端に複雑な形態をとるようになった。

この社会悪は科学と民主主義と社会主義のこの時代においてさえまさに同じ形態で生き残ってきた。それはカーストに支配されたヴェーダのあるいはヒンドゥの宗教を信じる人びとをさまざまなセクトに分裂させ、かれらへのハラスメントを作り上げた。非アーリヤ人は、ヒンドゥ教徒でなく、カースト制度を信じないので、社会的序列においてより低いと見なされ、侮辱され、征服されてその無実の犠牲者とされた。これらはさまざまなモンゴロイドあるいは *Austrie* の部族出自の人々、すなわち、ライ、リンプー、サタールなどである。グルン・コミュニティにおいては、「チャール・ジャート」と「ソラー・ジャート」の間に差別がある。マガール、ライ、タルーおよびいくつかのテライの部族民は、彼ら自身の部族内にはこのようなカーストに基づく差別やアンタッチャビリテイは存在しないけれども、ヒンドゥ教への改宗を強制された。しかしかれらは、このようなカースト差別の苦い経験を感じているという事実にもかかわらず、バラモン教の造つたアンタッチャブルに対するアンタッチャビリテイをおこなっている。これらの部族は、ネパールではさまざまな場所でクシヤトリア、ヴァイシヤ、シュードラおよびアンタッチャブルと呼ばれている。なぜこのような融通無碍さと不確実性が存在するのか？何が事実なのか？

バラモン教的文学の形成の間に、職業ではなく生まれにもとづいてカーストを決定するという概念が進展した。文明と文化の進展とともに分業がはじまった。のちに労働と技術と技能の進展の結果としてさまざまなカーストがあらわれた。アンタッチャビリテイの始まりに先立って、ヒンドゥとアンタッチャブルとの間の差別は敗者と勝者

のそれに関連づけられた。敗北したものは時間の経過のなかでアンタッチャブルと宣せられた。この事實は、ヴェーダ後期の諸著作、サンギタ典 *Smṛiti Saṅghitas* によって支持される。やさしさに對して強大な力がますます勝利するにつれて、家父長的社会が女性に對する支配を確立した。それは彼女たちを助けのない無視される状況のなかへと押しやった。三つの上位カーストは團結して、女性とシュードラからヴェーダ期の諸權利を奪った。次第にサブカーストの概念が進展した。その結果、同じコミュニティの相互の影響のなかで分岐があらわれた。それはコミュニティ内に支配階級の役割を生ぜしめた。その結果、社会的評判を判断する態度において冷淡さが支配的になった。ブラーマンのコミュニティは独占の方向に向かい、カーストや台所に感情的なバリアを立てることによつて極端にエゴイステイックになった。その上、幼時婚、老人婚、一夫多妻や不適合婚が、抵抗されるよりもむしろ奨励された。ジャイシ、ガール、バート、サニヤシ、タクリ、ハマル、ブイハール、ナガルコッティ、ゴラク、クンダクそしてプラティロムのようなサブカーストが数において増加していった。こうした墮落は絶頂に達した。その結果、現存の社会的伝統が逆に影響をうけ、規定された規範に反して子供たちを生んだかどで処罰するよくな狭量な態度がでてきた。混血の子供を憎み、彼らを罪人やアンタッチャブルとして扱い、そして彼らをコミュニティから追放するというような非人間的態度が次第に拡大するようになった。このような墮落の起源は、敗者をその奴隷や社会的アウトカーストとして扱い、彼らをコミュニティから追放し、そしてかれらに屈辱を与えることから始まった。

取引や産業もまたアンタッチャビリティの原因ではない。ブラーマンはブディストを憎むと同じやり方で敗者に對しかれらに悪意を持った。同様に、アーリヤ・ドラヴィダ戦争で勝利したアーリヤ人はドラヴィダ人をその奴隷にした。それに先立ち、ドラヴィダ人は部族民に對して勝利を収めており、彼らを奴隷やアンタッチャブルとして

扱っていた。このカースト制度は近代的系図の具体的形態ではない。現存のカースト制度によれば、ムスレムおよび他の宗教出身の人々もまたアンタッチャブルように扱われている。こうしてヒンドウコミュニティのカースト制度は宗教の派生物なのである。

階級制度とアンタッチャビリテイ

仏陀は紀元前五世紀にカースト制度に対する革命を開始した。シャッキヤ族は自らをクシャトリヤと呼んでいた。こうした事実は、その時期にはすでに西部ネパールのテライでカースト制度が存在したということを示唆する。バグマティ峡谷や他の山岳地域は当時キラントによって支配されていた。それゆえ、彼らはカースト制度を持っていなかった。しかし、それは、これらの地域にシャッキヤやマツラやリッチャヴィが入ってくることによって、次第に行われ始めた。紀元後五世紀には、カースト制度はリッチャヴィの領土の拡大とともに広がっていった。

すべてのリッチャヴィの王たちのなかで、プリシヤ・デーヴァだけが仏教徒で、ほかはヴェーダ期の宗教と階級制度を採用した。マンデーヴァ王 (AD 四六四—五〇五) はチャング・ナラヤン寺院を建てた。かれがカースト制度に従ったということは、そのことから、また彼の碑文の多くからも明らかである。タンコットにあるバサンタ・デーヴァ (AD 五〇六—五三二) の碑文は「ジャイバリッカ村のブラーマンを含む一八のカーストすべてによる貧農の福祉」に言及している。これは四つの階級と一八のカーストが存在したことを示唆している。同様に、アンシュヴァルマー (AD 五八八—六二二) によるティスツングの碑文 (AD 六〇七) は「アーリヤの行為規範すなわちカースト制度を侵犯することを許さない」ことについて語っている。

中世にカトマンドゥ渓谷のマツラ王朝の王たちは、何百というヒンドウ寺院を建てた。ジャヤステイッティ・

マツラ（AD一三六〇—九五）は、カースト制度を広範囲にわたって制定した。ゴルカ王のラム・シャハ（一六〇五—一三六）がカースト制度にもとづいて社会を組織した東部テライでは、AD一〇九七年から一三二五年にわたってカーストの登録制度が支配的となった。カースト制度はまたAD一三三八年頃にはカルナリ地域において強まっていた。こうした事實は、今日のネパールのさまざまなところで支配的なカースト制度は、中世に急速に拡大したことを示している。ジャヤステイティ・マツラとラム・シャハはヒンドゥ諸聖典とマヌ法典にもとづいた厳しい社会的諸規制をおこなった。こうした規制によれば、低カーストの人々は公然と差別され、普通の人間として生活するための諸権利を剥奪された。彼らは上層カーストの人々に比べて衣・職・住の点でさえも差別された。衣類はそのカーストにもとづいて着られた。低カーストの人々は、ブッカの建物を建てることを禁じられ、町から遠く離れたり、川の土手に住んだりすることを許された。ジャヤステイティ・マツラによって枠組みを与えられたこうした規制は、スレンドラ王体制の時のシヴィル・コードの施行まで同じ形態でつづいた。

ネパールのサブカーストの創成は独特である。たとえば、高位カーストの父と低カーストの母から生まれた子供は昇格のケースであった。今日も存在するところの浄化し水を撒くような、書かれない慣行があった。流浪するサニヤーシの父から生まれた子供やカースト間の結婚関係もまた同じカテゴリーに属する。

昇格につづくのは降格である。シヴィル・コード（一八五三—五四年）はネパールのコミュニティを二つのカーストへと法律化した。「その水が清浄である」と認められるカーストと「その水が不浄であるカースト」とである。第二のカーストは、あるところでは水の撒布を必要とし、他方、他のところではそれを要求することをしなかった。ラナ体制の時に、三つのカーストの首領は、彼ら自身のカーストに関連する問題を解決する権限を授けられた。

カミ（鉄鍛冶工）やサルキ（靴職人）のかしらは「ミジャール」"Mijars"と呼ばれた。同様にダマイ（仕立て屋）

のかしらは「ナガルチ」Nagarchi」と呼ばれる一方、最初のカテゴリの他の諸カーストは彼ら自身のかしらをもった。このシステムは、コミュニティのメンバーが、些細な法的諸問題を解決するために、事務所または法廷に行かなくてもよいことを目的にして展開された。しかし、ミジャールやナガルチは、当該コミュニティに対して行われた不正や搾取を増加させた。彼らは明らかにその主人達の性質によって影響された。主人達と同様に、彼らは決して自らのコミュニティに対して不正をおこなうことをためらわなかった。彼らに対するいかなる訴えも聞かれなかった。

中世以降、そのカーストで降格された人々は、カースト制度と彼らの敗北によって、その低下した社会的地位をもった。その結果、彼らの食、住と移動において悪化が生じた。彼らは、マナーと衛生と自尊心において悪化しはじめた。カーストにおいて自らをよりすぐれたとみなす人々は、彼らを抑圧する原因としてそれを利用した。かくて、寺院に入ったり、教育を受けたり、高位カーストの人々の教説を聞くことや、参拝することや、バーの木あるいはピパルの木を植えることや、池を掘ることや、あるいは威信を永続するために他のあらゆることをすること、ほかの者のようにご馳走や祝祭、他の社会的慣行を享有することにたいして、非人間的で反社会的な禁止がおこなわれた。一般的に言って、これらの慣行は、社会的アウトカーストの慣行よりも厳格であるとみられた。その結果、低カーストの人々は野蛮な拷問に直面しなければならなかった。たとえば、彼らはアンタッチャブルの生活を送らねばならなかった。彼らは国から追放されないように高貴に生まれた女性を見ることができなかった。もし彼らの上層カーストの人びとのなかへ走りこむならば、彼らは道を落ちていかねばならないだろう。かれらは何物であるかと、敬意 (JADAU) を払わねばならなかった。抑圧に反対すれば死刑に処せられるであろう。もし高位カースト出自のだから低位カースト出自の女性と結婚すれば、かれは「ジャリカート」Jarikhatの資格をもたなかつ

た。もし彼らが（聖）紐を身につけた、あるいはつけていない人々に触れるならば、水を撒くのを求めることが必要だった。上位カーストとの双方向の会話は彼らには禁じられた。シヴィル・コードのこうした差別的な諸規程は、パルスカール・グリヤシュートラ *Paraskar Grihasutra*、ガウタム・シュートラ *Gautam Sutra*、マヌ法典、それにシュクラ・ニティ *Shukra Niti* のようなヒンドゥ経典にもとづいていた。こうした人々がこんなやり方で軽視される場合、経済、社会、文化、行政分野への彼らの参加という問題は生じようがなかった。このため、土着の音楽樂器を演奏したり、木材を切ったり、皮革の仕事をやったり、音楽や美術やダンスをやったり、石をカットしたり、丸石や陶器類を割ったり、労働者として賃金を稼いだり、便所掃除をしたり、洗濯したり、死んだ動物の皮をはいだりするような、低賃金の手仕事で生きることが余儀なくされた。かくてこうした無援の人々は一九五〇年まで拷問で苦しめられた。彼らは人間として扱われず、彼らの叫びは聴かれることはなかった。

現在のカースト制度もまた、四つの階級と三六のカーストから成るといわれている。しかし、それは、通常山岳部と丘陵部においてなされるラフな評価にすぎない。ネワールのコミュニティとテライのコミュニティは三六カースト以上から成っているのだ。

パンチャヤート体制の時に於いて、ネパールは「ヒンドゥ国家」と呼ばれた。ネパール王国憲法（一九九〇年）も、またそれを保持している。世界で唯一のヒンドゥ国家、ネパールでは、アンタツチャブルとして扱われた何千名もの人々が、何世紀の間、法的に苦い経験をしてきた。ヒンドゥ教にもとづく法制度のゆえに、下層カーストの犠牲者は、リツチャヴィ、マツラ、シャハおよびラナの時期（キラントの時期を除いて）に、同じ犯罪で高位カーストよりも、非人間的で厳しい刑罰を与えられたという証拠に、歴史は満ち満ちている。たとえば、マツラ期には、ブラーマンの女との性交のとがで、シュードラはペニスを切り取られ、それを食べさせられ、そしてチャン

ダール (「人殺し」) によって屠殺される、という法規程があつた。同様に、ラジェンドラ・シヤハ体制の時期には、布告された法律 (1893 ASHADH SUDI 7 ROSE 4 BS) があつたが、それによると「もしダマイ、スナール (カミ)、サルキ、バラミ、マジ、ダヌワール、ムルミ、ボテ、チエパンおよびクマールのようなシユードラ階級出自の人間が、その兄弟の妻と故意に性的関係を持つならば、彼は死刑に処せられねばならない」。一九六三・一九六四年の新たなシヴィル・コードの施行より前は、この法的規程が継続していた。その上、これによれば、高位カーストの諸個人は、低位カーストの女と性的関係を持ったかどで告発されても、より軽い刑罰に処せられたが、もし低位カーストの人々が高位カーストの女と性交すれば、彼らは一四年の禁固を宣告されたのである。一九六三・一九六四年のシヴィル・コードは疑いもなく原則として、いわゆる高位カーストと低位カーストの人々の間の法的平等を確立しようとしている (シヴィル・コードの最近の修正によれば) し、アンタッチャピリティは今や処罰を免れない。しかしながら、このコミュニティはまだ法律への平等なアクセスを享受していない。こうした不平等で非人間的な慣行は後に詳しく論じられるであろう。

アンタッチャブルとは誰か？

(a) 装飾品、武器、陶器類を作る仕事や他の労働技能に従事するコミュニティ

その水が穢れているカースト/部族の間で自らをすぐれていると見なす人々は、次の名で呼ばれる。カミ Kamis (鉄鍛冶工)、スナール Sunars (金細工師)、ロハール Lohars (鉄鍛冶工)、ヴィシュワカルマ Vishwakarmas (V. K.)、ソブ Sobh、スネヒ Snehi、ネパリ Nepali など。彼らはその従事すると見られる職業にちなんで名付けられた。たとえば、金に関係する仕事に従事する人はソナル Sonar である。家を建て、あるいはつぼを作る者はオッド Od

である。銅からものを作る人はタムタ Tanta である。鉄関係の仕事に従事するものはロハール Lohar である。木から家庭用品を作る者はチユナラ Chunarā である。竹からものを組み立てるものはバルキ Parki と呼ばれる。布織りはコリ Koli、皮革業に従事する人はブル Bhool である。

ラナ体制時にこのコミュニティに関連する問題を取り扱うよう委任された人は「ミジャーール」といわれた。ある人々はその姓あるいはサブカーストとしてこの名称を持つとみられる。西部では、金細工師が「ミジャーール」と呼ばれている。このコミュニティはネパール全土に分布しているとみられている。それは次のサブカテゴリーを持つ。

アグリ Agri、アチャリヤ Acharya、アーブラドレーティ Aafadhori、ウオケダ Wokheda、ウオド／ウォル (Wod / Wor)、カタラ Kadara (カントラ Kandara)、カラダ Karada、カサラ Kasara、カロノール Kallohar、カリローテ Kalkote、カリラシ Kaliraji (シヤフー Shahoo)、クブキ Kumaki、カイニ Kani、コイララ Koirala、コリ Koli、カドゥカトキ Khadkathoki、カパンギ Khapangi、カティ Khati、ガジュメル Gajmer、ガジュレル Gajurel、ガダル Gadai、ガダイリ Gadaii、ガハテ Gahate (ガハトラージ Gahatraj)、ギリ Giri、ゴタメ Gotame、ゴフ Gowa、ガタニ Ghatani、ガブル Ghamal、ガルティ Gharit、ギミレ Ghimire、カムコートル Ghanghotle、ギミレ Ghimire (シヤパティ Sijapati およびギミレ Ghimire 共「ショブ」Shobh と呼ばれる)、ゴタネ Ghotane、チャンダーラ Chandara、チャンターロ Chandaro、チリメ Chilme、ティフリ Tiwari、チユナラ Chunarā、チイスタル Chhistrā、シヤンドカニ Jandkani、タプタ Tamata (タムラカール Tamrakar)、タグンナ Thagunna、タテラ Thatera、チイルワ Tiruwa、ダヤル Dayal、ディヤリ Diyali、ダラニ Dalami、ダルナル Darnal、ドゥドゥラーシ Dudraj (ドゥドゥラーシ Dudhraj)、ドゥラル Dural、デウパーテ Deupate、デワール Dewal、ダブラ Dhamala、ダニク Dhanik (ダヌク Dhanuk)、ナガルコッティ Nagarkoti (カブレ Kabhre およびシンズパンチョーク Sindhupanchowk) の

ラセイル Raselis は今日も使っている)。(ニラウラ Niraula、ネパール Nepal、パンティ Panthi、パッラ Palla (ヤヤ)、パグジュリ Parajuli、パハリ Pahari、パティヤフツチイ Padyawati、パグリ Pagri、パルキ Parki、プラムシ Pulami、ホカレル Pokharel、ポルテル Portel、ホウデル Poudel、バライリ Barali、バラリ Barali、バラル Baral、ブンチェブハール Bunchebhale、バンスコタ Banskota、ゴパリ Bipali、バッタライ Bhattarai、フサール Bhusal、ブール Bhool、マヒリパール Mahipar、マール Mar (マノール Mahar)、ミジャール Mjhar、サイリ Rasali、ラーバル Ralpal、ラジロハール Rajirohar、ラムダム Randam、ラムダムー Randamoo、リジャール Rijar、リッサル Risal (ライサル Raisalis が使用している)、ルチャール Ruchal、ライカル Raikal、ラカンドリ Lakandri、ラトゴ Latopi、ラバド Labad、ラムガーチ Langade (これは三つのサブカテゴリーを持っている)、ラマカルミ Lamakarmi、ラミチハネ Lamichane、ホウデリ Poudeli)、ロハニ Lohani、ロハール Lohar、ルワグン Lwagun、ルハグン Luhagun、シャサンカール Shasankar、シャフー Shahoo、シハララ Sherala、サタサンカール Sadasankar、サタサンカール Sattasankar、サプロータ Sapkota、サニ Sani、スンドトゥーフ Sundhuwa、スンチュユリ Sunchyuri、スンチュウリ Sunchiuri、シンガウレ Singaure、シジャパティ Sijapati、シルパリ Sirpali (シユリパリ Shripali)、スニ Suni、セタイパール Setipar、セタイマハラ Seti Mahara、セティスラル Setisural、ソナム Sonam、ヒムチュリ Himchyuri など)。

(b) 布を織ったり地域の音楽楽器を弾いたりする仕事に従事するコミュニティ

布織りに従事する人々は「スチカール」suchikar、または「スジカール」Sujikar と呼ばれる。「ダムウ」damau (ダムハ damaha)、ドラム、フドッコ hudko、そしてデヴァバジャ devbaja のような音楽楽器を演奏する人々は、

それぞれダマイ damai (ダマヒ damahi)、ドーリ dhoi、フドゥケ hukke、そしてナガルチ nagarchi と呼ばれる。彼らがかつて弾いていた音楽楽器のタイプにあわせ、これらの名前で彼らと呼ぶことは自然であった。布織りに雇われた人々は、今ではダルジ daji、テラー、マスター、テラー・マスターと呼ばれている。ダルジという言葉はムスレムの織工に限定されていた。しかし最近、それは、布織りや音楽楽器の演奏に従事するすべてのものに使われている。同様にダマヒもまたその意味を広げてきている。最初それは、「ダマハ」と呼ばれる特殊なタイプの音楽器を演奏する人々にのみ当てはまるものだったが、いまやそれはカースト全体に関して用いられている。実際にはそれはカースト全体あるいは個々のカーストについて用いられるべきものではない。サブカーストはたいいていアーリヤ人のカーストと一致する。パリヤール Pariyar、ネパリ Nepali、ダルジ Daji、そして他の類似の姓が最近はやってきた。西部ネパールでは、ダマイがごく最近用いられるようになった。ダマイは東部では軽蔑的に呼ばれるのだが、西部ではドーリがそうである。このコミュニティはネパール中に分布している。それは次のサブカテゴリーを持つ。

アササイ Asasai、アージュジ Auji、カンドル Kandel、カツワル Katuwal、カルキドーリ Karkidholi (クーラル Khular)、ムドゥラ Mudula、ラマ Lama、スタール Sutar)、カラカーティ Kalakhari、コイララ Koirala、カティワダ Khairwada、グインデ Guinde、ガウタム Gautam (ゴタメ Gotame)、ガタニ Ghatani、ガール Ghale、チャハール Chahar、チュハン Chuhan、チヒナル Chhinal、ジャイル Jari、タゲンナ Thaguna、タタール Thatal、ダウンデ Daunde、ドーリ Dholi (自分達のサブカーストを忘れた人々によっても用いられる)、ティヤキ Dhyaki、ティワリ Tiwari、ティカトリ Tikatri、タパ Thapa、ダルナル Darnal、ダマイ・パリヤール Damai Pariyar、ダマイ・パレル Damai Parel、ダス Das、デウカル Deukar、デワル Dewal、ナグワグ Nagwag、ナグワン Nagwan、ナ

ガルチ Nagarchi' ネギ Negi' ネパール Nepal' ナウバダ Naubag' パリヤール Paryar (アチュアメ Achhame' チュダル Chudal)' パンチロッチェ Panchkoti' パンチャロッチェ Panchakoti' バンク Bahak' ホカレル Pokharel' バルデワ Bardewa' バタチャン Bagchan' バタダス Bagdas' ブタポッチェ Budhapothi' ブータプリチェ Boodhaprithi' バイジュ Baiju' バンダリ Bhandari' ボトウリロッチェ Bhirikoti' ブサル Bhusal' プガール Magar' マンチ Mahate' マハラ Mahara' マレ Male' ランパル Ranpal' ランパレンリ Rampahenli' ラトウナ Ratna' ラトウネ Ratne' ラトウナパリヤール Ratnapariyar' ラナ Rana' ライガイン Raigain' ライカ Raika' リヤインジヤイン Ryainjyain' ラムガータ Langhate' ルインテル Luintel' シナル Shinal' シラル Shilar' シワ Shiva' スイワ Siwa (ククル Kukhure' ゴータメ Gotame' ベーデ Bhede)' サムドゥラサイ Samudrasai' スナル Sunal' スナム Sunam' スナム Sunam' スンチュエリ Sunchyuri' スンチュウリ Sunchhuri' スタス Sudas' サスムンドゥラ Sasmundra' シヤハサムドゥラ Shahassamudra' スージ Sooj' ヒンタマン Hingmang' フトゥケ Hudke など。

(c) 皮革業のコミュニティ

このコミュニティはサルキ Sarki' チャルムカール Chamkar' およびシジャール Mijhar' として知られている。ネパールの東部では住むことが少ないので、それは主としてカトマンドゥと辺鄙な西部地域に分布している。西部ネパールでは二つのレベルのサルキークーストのあるおよびカーストのない一があり、ブル Bhool' と呼ばれている。このコミュニティは、自らを社会的地位においてカミ (ヴィシユワカルマ) に等しいものとして扱う。それは次のサブカテゴリーを持っている。

アチュチュハミ Achchhami' アチュハミ Achhami' ウバルロッチェ Uparloti' ウプレッティ Upreti' カマール

Kamar' コイララ Koirala' カティワダ Khairwada' キリ Giri' ガイレ Gaire' ガイレゴパン Gairepan' コーテ
 Gothe' キニン Ghimire' チャポール Chamal' チュダル Chudal' チュハン Chuhan' チャトウクリ Chhatkuli' タ
 ダンナ Thaguna' チャマルキ Chamarki' タクルシヤ Thakursya' タラナイ Thararai' タレ Dale' トンギ Tolangi'
 タパリヤ Thapalya' タク Tak' タウラロツティ Daulakoti' テイヤウラロツティ Dyaulakoti' ターダ Dabe' タ
 ハル Dahal' ドゥラル Dulal' タメル Dhanel' ナガリ Naghar' パンヘリ Pahenli' (パンイェリ Panyeli)' プルコ
 ティ Purkoti' バチャル Batsyal' バセル Basel' バムレル Bamrel' バヤルロツティ Bayalkoti' バスタロツティ
 Bastakoti' ビスウンケ Bisunkhe' ホガティ Bogati' バンギヤル Bhangyal' プール Bhul' シヤンル Bheyani' プ
 ルテル Bhurte' マングラナイ Mangrai' マガラナイ Magarati' (アースサネ Aththane' カト Kala' キリンゲ Khlinge'
 ドウードゥ Doodh' ドゥール Dhur' バルハサネ Barathane)' マジユホーティ Majiboti' マルプール Malbule'
 マルボク Malbok' ムテル Mudel' ラムテル Ramtel' ルチャル Ruchal' ロイラ Rolla' ロッカ Rokka' ラムジェル
 Lamjel' ラムサル Lamsal' シヤビ Shahi' シュリマツティ Shrimati' シイリマル Sirimal' サルプウテ Sarmaute'
 シイラウテ Siraute' スルケーニ Surkheni' スヘンル Suyenl' セジュフル Sejwal' ヒタン Hitang なま。

(a) 歌のジプシーのコミュニティ

歴史的勇敢さの歌を歌ってネパール全土を歩き回るコミュニティがある。これらの人々はガイネ Gaine あるいは
 ガンダルワ Gandharwa として知られており、アンタツチャブルともみられている。彼らはまた自らを「ネパリ」
 Nepal' とごう姓でも呼ぶ。彼らはジプシーのようにさまざまな場所を歩き回りつづけているけれども、彼らは主と
 して西部あるいは中央西部地域の諸郡、すなわちジユムラ、カスキ (パトゥレチャウル)、シヤンジャー、ゴルカ、

タナフン、パルパ、グルミ、バイラーワ、スルケート、ダイレク、ジャージャルコート、ルクム、ピュータン、ダ
ンそしてサリヤーンでは定住していると見られる。彼らはまた東部地域のカトマンドゥ渓谷やボージブルでも見
出される。彼らの姓のうち限られた数だけがもともとのものに思われる。その姓のたいていは、ブラーマンやチェ
トリやカミのそのようであるが、一方、その若干は特殊な場所にちなんで名前がつけられた。これらの姓は以下
のごとくである。

アディカリ Adhikari、カミ Kami、カラ Kala、カウシク Kaushik、カラポウネル Kala Poudel、カリチャン Kalichan、
ゴサイ Gosai、シヨギ Jogi、タクリ Thakuri、トゥルキ Turki、バフン Bahun、ブダトーキ Budathoki、バイカル
Baikar、ワギヤカル Wagyakar、バイスタ Baistha (ビスタ Bishta)、ボガテ Bogate、ブサル Bhusal、ブサルバル
バーテ Bhusalparbate、マシユワール Maheshwar、メタナトゥ Meghnath、ギシユワカル Bishwakarma、ビ
シユヌパド Bishnupad、サムドリ Samudri、サイ Sai、スルサマン Sursaman、セタパールバーテ Setaparbate、セ
ティチャン Setchan、ハクチンラナ Hukchingrana など。

(e) バディ・コミュニティ

バディ Badi のコミュニティは東部地域のボージブル、テラトゥムおよびその他の諸郡にまばらに住んでいて、
死んだ動物の皮をはいだり、マダル Madal やドラク Dholak などのような音楽楽器を演奏したり、マダルに皮を張
るような仕事に従事している。このコミュニティの女性達は売春に関係しているようにはみられない。このコミュ
ニティは、西部ネパール、特にトゥルシール、ダンやネパールガンジで人口が稠密である。それは、たいてい、バ
ンケ、ダン、カイラー、そしてスルケート郡に住んでいる。このコミュニティの女性はここではたいてい売春に関

係があると思われる。

中央西部地域では、バディはスルバ Sulpa (パイプ)、チリム Chirim (水キセルの火口) や料理道具、水貯蔵道具のようなポットを作る。伝統的には、彼らはかつて、ダンスをしたり、施しものを乞うたり、ある場所から他の場所へ移動したりしたものだ。しかし今や、彼らは他のタイプの職業を持っている。バディは、ドーティ、バジャー、サリヤーン、ピュータン、カーリコート、ダイレク、ルクムや他の郡にまばらに住んでいるが、売春をしているとはみられない。インセックの最近の調査によれば、バディの人口は約二〇万人と評価される。しかし、彼らの居住は上述のものとは違う他の郡でも見られるという報告にもとづけば、その人口がそれを越えるであろうことは明らかである。

トゥルシープル、ダン、ネバルガンジに居住するバディは公然と売春を行っているが、それを彼らは主要な職業として採用している。バディの男は、そのコミュニティの女のために顧客を求めて、お互いに競争しようとする。いわゆる上位カーストの人はバディの女とベッドで寝るが、しかし彼らは、自らを浄化するために水を撒かないようにしてこのコミュニティを思いやることはない。これまで、バディ・コミュニティに売春に代わる代替策を提示し、社会における尊厳を獲得するのを助けようと言う公的レベルでのいかなるイニシアティヴも取られなかった。これに関連して、「教育への社会的自覚」(SAFE) が、この地域にある地元のバディ・コミュニティの向上と尊厳を名目として、そのプログラムを開始した。ネバルガンジ市の九番区、ガガンゲンジでバディの所有する約四二のブッカ・ビルがあるが、それは「赤線地区」として非難されている。バディの若い少女はガガンゲンジ、売春のメイン・センターからインド各地に売られ、送られる。少数のバディの女性が不名誉な職業にふけっていることにより、バディ・コミュニティ全体を憎悪をもって見るという悪い傾向が発展していく。

東部ネパールのボージブルや他の近隣地域に住むバデイは、社会的地位においてはカミに等しいとみなされている。ここでは、これらコミュニティの両方はまた相互婚姻関係を持っている。

バデイを範疇化するとそれはカミ、ダマイ、そしてサルキの場合に類似する。それは、時の経過でアンタッチャブルとなり、踊ったり歌ったり他の種類のリクレーションに従事することを余儀なくされたシェードラの一部が、ついにバデイになったということを示唆する。彼らの伝統的な姓を述べて市民権を獲得することが可能になったとき、彼らは自らをバデイと呼ぶことを余儀なくされた。「バデイ」という語はヴァディヤバダク Vadyabadak (音楽楽器を演奏する者) を意味する。明らかに当時、このコミュニティは音楽楽器を演ずることに従事していた。それゆえ、バデイはカーストではなく、職業であった。しかしながら、最近この言葉は不幸にも不名誉な職業と関連付けられて、いまや、それははっきりしたカーストと同一視されている。

(写真二葉、バデイの住居、ドーティ出身のおどるバデイの少女、略)

(f) クマル・コミュニティ

粘土陶器類の作成に従事する人々のコミュニティは、クマル Kumal (クマール Kumhar) として知られている。クマルは、ネパール全土に分布しているが、あるところではタッチャブルと見られ、他ではアンタッチャブルと見られてきた。東部ネパールでは一〇のクマルのサブカーストが見出される。彼らは社会的地位では自らをネワールと同等視する。この点では、彼らの水は他のカーストによって受け入れられる。セティ県のアチャーム郡に住むク

マルは、自らをクシャトリヤに等しいものとして扱う。ここでは、彼らはまたクシャトリヤと婚姻関係を持つ。しかし、同じ県のデイパヤル・スイルガデイのクマルは、アンタッチャブルと見なされている。同様に、マハカリ県のクマルもまたアンタッチャブルである。

(g) 洗濯職に関するコシユニテイ：ドービ

山のドービ Dhobis (「洗濯人」) は自らをアンタッチャブルより優れているとみなすけれども、いわゆる上位カーストの人々は彼らをアンタッチャブルとして扱う。テライには二つのカテゴリーのドービがいる。—ラジ・ドービとドービである。ラジ・ドービの水は受け入れられるが、ドービの水は受け入れられない。カトマンドゥ渓谷でもまた、ドービはアンタッチャブルと見なされている。

(h) テライ (マデシユ) のアンタッチャブル

テライのアンタッチャブルはなまなまな職業に関係していると見られる。彼らは、アゴリ Aghori、カロリ Karori (ヤダヴ Yadav のサブカテゴリー) のアンタッチャブル)、キチチャク Kichhak、キサン Kisan、コチエ Koche、カトウエ Khatwe、ガンダルワ Gandharwa (ムスレム)、チャモール Chamar、チチ Mochi、ハリジヤン Harijan、チデイマール Chidimar、グデイハラ Gudhara、シヤンガート Jhangad (ウラウン Uraun、ウラム Uram)、シヤンガール Jhangar (カチュフワ Kachhuwa、カラフ Kharawa、バカラ Bakala、ブジラ Bujra、シク Bekh、ラカタ Lakada)、ドゥーム Doorn、ドム Dom、タンガール Dhangar、タトウマ Tama、タンティ Tanti、トゥーリ Toori、トゥサドゥ Dusadh、トゥニヤン Dhuniyan (ムスレム)、ドーブ Dhobi、ナトゥ Nat、パマリヤ Pamariya、パスマン

Paswan¹、Pasi²、Bantar³、Bantari⁴、Bhilla⁵、Byuiya⁶、Mirshikar⁷、Munda⁸、Mushar⁹、Sada¹⁰、Rachwar¹¹、Sharbhanga¹²、Shai¹³ (ムスレム)¹⁴、Satar¹⁵、Santal¹⁶ (サタル Satar)¹⁷、Halkhor¹⁸ など、を含む。

(一) ネットワーク・コミュニティ内のアンタッチャブル

我々の意味する「ネットワーク・コミュニティ」とは、ネットワーク語が母語として用いられる言語コミュニティである。しかしながら、ネットワークは明らかに独特のカーストである。ネットワークの中核エリアはカトマンドゥ渓谷である。彼らはまたネットワークのさまざまな都市エリアにも住んでいる。彼らはさまざまな方言ではあるが、ネットワーク語を使う。ネットワークはまた農村地域にも見られるが、彼らはネットワーク語を失っている。ネットワーク・コミュニティはヒンドゥ教徒と仏教徒に分けられる。彼らの社会的慣習やコードにもとづいて、ヒンドゥ教徒と仏教徒を区別することはむしろ困難である。

カースト制度は最初、リッチャヴァイ期のはじめの頃にネットワークで起こったと思われる。この観念はヴァイシャヴィスム Vaisnavism としてはじまり、シャーマニズム (自然宗教を含む)、シャイヴィスム Shaivism としてブディズムと同化しはじめた。ヒンドゥ教徒のネットワーク・コミュニティにも仏教徒のそれにも、ともにカースト制度が存在するとみられている。このコミュニティにはカースト制度がとくに複雑にからんでいることは明らかである。カトマンドゥ渓谷では、ジャヤステイティ・マツラがマヌ法典にもとづいてカースト制度を確立した。したがって、さまざまなカーストの社会的地位に一致した職業を採用し、着物や飾りをつけ、家を建てることが要求された。こうした規則に違反することは、ある罰を免れなかった。カーストがさまざまな職業にもとづいたという事実にもか

かわらず、のちにアンタツチャビリテイが展開した。カースト差別とアンタツチャビリテイの状態は、カストとマイテイリのコミュニティのそれとは少し異なっているようである。たとえば、カストとマイテイリのコミュニティでは、アンタツチャブルたちは等しく扱われるが、他方ネワールのコミュニティでは彼らは異なつた形で差別されている。たとえば、カサイ Kasai (屠畜者) は家屋を二階まで建てることを認められており、チャメ Chyames は二階まで、ハルフル Harhurs は家に入ることを完全に禁止されている。一般的には、アンタツチャブルは家屋の上階に行くことを許されていない。屠畜者のミルクや肉は受け入れられるが、彼らの炊いたご飯を食べることは受け入れられない。ドービヤナピト Napits (散髪屋) の炊いたご飯を食べることは受け入れられないだろう。

シヴィル・コードの施行(一八五四年)に先立ち、ネワリ・コミュニティ内のあるシユードラたちがアンタツチャブルとみなされた。かれらのうちのあるものは水の撒布を必要としたが、他方他のものはそうではなかった。ドービ Dhobi、カサイ Kasai、クスレ Kusule としてクルー Kloo のカーストが第一カテゴリーに属し、ポデ Pote およびチャメ Chyame のカーストが第二に属する。

伝統的に屠畜者はカサイ(カドゥキ Khadkis)と呼ばれる。彼らはカトマンドゥ渓谷で葬式の行列やさまざまな祭礼において、ナイキン Naykin と呼ばれる音楽楽器を演奏する。ラナ体制期には、ガイジャトラやインドラジャトラで演じられたラケ Lake のダンスやカサイのバルタン Palan はとても人気があった。国王軍隊においてさえも、バドゥシャヒ Badshahi という音楽楽器を演奏する人々にはカサイも含まれていた。今や、情勢の変化とともに彼らの職業は拡大している。彼らは自身を肉や野菜の販売に限定するだけではなくて、また徐々に他の多くの職業を選ぶようになっていく。彼らが交易やビジネスに長く携わっているので、彼らの経済状態は他のアンタツチャブルのそれよりもよいと考えられる。

クスレは古代から、寺院でのよき印として、また結婚やブラトウバンド *brabandh* (「紐付けの儀式」) のようなめでたい場合に、パンチャバジャ *Panchabaja* を演奏してきた。彼らの存在はめでたい場合に必要とみなされている。かれらはまた仕立て業にも従事している。そのほか彼らは、マダル *Madal* やキンマ *kinma* のような音楽楽器もまた作ってきた。彼らはタル・バジャ *Tal Bajas* (ある種のドラム) を演奏したり売ったりすることにとても熟練していることがわかつている。

ポデとチャメは、カトマンドウ、バクティプール、ラティプールに定住していることがわかつている。彼らの住む地域はポデ・ツール *Pode Tool* (居住区) と呼ばれている。彼らは自らを「デューラ」*Daulas* といつている。彼らは伝統的にごみの清掃に従事してきた。今日では「清掃人」としても知られている。もっと丁寧な言葉で言えば「清掃労働者」と呼ばれる。

髪をくしけずったり、爪を切ったりすることに従事するコミュニティは「ナピト」*Napit* (散髪屋) と呼ばれる。同様にその職業が洗濯である人々は「ドービ」*Dobis* (「洗濯屋」) と呼ばれる。カトマンドウでは彼らは主にドービチャウルやドービダラに住んでいる。ラティプールでは、彼らがおもに住んでいるのは、ドービガートである。近年大洗濯場は他のものによって経営されるが、ドービは小さな洗濯場しか持っていない。

ネワールのアンタチャブルのなかで最低なのはハルフル *Harhures* (「基盤をもたない」) である。その先祖は不明である。彼らは物乞いで生活している。彼らの人口は小さいとみられている。彼らはガテマンガルのような場合にしばしば物乞いをするときみられている。カトマンドウ渓谷の外側に住むカス・コミュニティでは、カサイ、ナピト、カパリ *Kapali* および他のネワールのアンタッチャブル・カーストは、タッチャブルとして扱われる。

ネパールのカーストにもとづくアンタッチャビリテイの状況

ネパールのカースト指向の社会には三つの主要なコミュニティがある。カス、ネワールそしてマイティリである。そのほかに、モンゴロイドの諸部族から成る別のコミュニティがある。カスとネワールおよびマイティリのコミュニティの社会構造には一致点が見出される。すなわち彼らはすべて四つのクラスを持っているのである。ブラーマン、クシャトリア、ヴァイシヤ、そしてシュードドラである。それらのなかには、ネパール起源とインド起源の間の違いもまた存在するが、それもまたプミプトラ Bhumiputra コミュニティとヤヤヴァール Yayavar コミュニティとしてそれぞれに言及されてもよい。ネパールにはまたヒンドウ教徒、仏教徒、イスラム教徒そしてキリスト教徒の宗教的コミュニティも存在する。これらのコミュニティのなかでカス、ネワールおよびマイティリは増大する複合的なカースト差別と抑圧を経験してきた。現在のネパール社会の論点は、ブラーマンとクシャトリアとヴァイシヤをサブ・カーストに分類し、カーストを一列縦隊にし狭めることにある。

別の観点からいえば、ネパールの社会は、明確にタッチャブルとアンタッチャブルに分裂しており、タッチャブルは彼らとの結婚関係は持たないし、また彼らが家に入ることを許さない。ネパールの西部では、彼らはまた水を撒くこと（浄化行為）を行う。低カーストの人々は、寺院や葬式場や飲料水の蛇口や井戸、レストラン、店や他の公衆の利用する場所の大抵を使用することを奪われている。モンゴロイド・コミュニティの部族もまた、ヒンドウ・カースト・システムの内部にはいないけれども、低カーストの人々についてアンタッチャビリテイを実行している。アンタッチャビリテイの慣行はアンタッチャブルにまで浸透している。その結果、アンタッチャブル・コミュニティそれ自体の内部で、タッチャブル・カーストとアンタッチャブル・カーストとの間に差別をつける程度にまで

なった。たとえば、カミとサルキのコミュニティはダマイのような他のコミュニティをアンタッチャブルとみなしており、他方、カミとサルキの間にさえ不平等が存在する。ダマイはガイネのようなコミュニティをアンタッチャブルとみなす。最近では、同じアンタッチャブル・コミュニティ内の人々が、その悲惨な経済状態によつてアンタッチャブルとして扱われてきたことが、辺境西部地域のいくつかの部分でおこなわれてきたとみられる。疑いもなく、差別に反対する被抑圧カーストによる組織的レベルでの闘いが開始されている。しかしながら、家屋内に公然と入ったり、結婚関係を持つたりすることは、依然として実質化されるどころではない。ネパール西部の丘陵地域では、若干のアンタッチャブルが自分達自身のレストランを持ち、いまやすべてのアンタッチャブル・コミュニティがそこに行くのである。

上位カースト出自の人々は、低位カーストの人々にたいして、「you」の非敬称的形態（「タン」Tan）を使う。逆に、低位カーストの人々は、上位カーストの人々に対して年齢に関わりなく「you」の敬称形態（「タパイン」Tapain）を用いなければならない。付け加えれば、彼らはまた、ブラーマンを「バジェ」Baje（祖父）、クシャトリアやマガールを「ムキヤ」Mukhya（親方）、そしてライヤリンブーを「スッバ」Subba（お役人）とか他の敬称形態で呼ぶ必要がある。

一九五〇年、民主制の到来とともに、社会的諸差別は、何らかの法的条項のゆえにはなく、上位カーストの人々自身のイニシャティヴのゆえに、崩壊しはじめた。しかしながら、この変化でさえアンタッチャビリティを廃止できなかった。公衆の利用する場所はあるところでは低位カーストの人々に開放されたけれども、状況は大部分変わらないままであった。シヴィル・コードでは、アンタッチャビリティにたいして法的制裁規程が作られてきた。しかし、その侵犯が何らかの特殊の刑罰を受けないがゆえに、それは無意味であることがわかった。しかしながら、

ネパール新憲法（一九九〇年）の第一一条第四項によれば、アンタッチャビリティは処罰すべきものとされている。シヴィル・コードもまたそれにしたがって修正された。こうした憲法のおよび法的諸条項にもかかわらず、アンタッチャビリティはなお実際に見られるのである。いわゆる上位カーストの人々は低位カーストの人々が寺院や他の公衆の利用する場所にアクセスするのを認めない（詳細は諸行事の叙述をみよ）。

国内に存在する、カーストにもとづいたアンタッチャビリティの状況は、地域のもついたものとしては以下のように示される。

辺鄙な西部地域

アンタッチャビリティは、特に丘陵や山岳部において極端な形で存在する。いわゆるアンタッチャブル・カーストは寺院や他の公衆の利用する場所へ入ることを禁止されている。たとえばアンタッチャブルはバイタデイ郡のデヒマンドウで毎年行われる市場に参加したり屋台を開くことを認められない。三年前、彼らは参加について郡主席官に請願書を出したが、今までのところこの点に関して何の措置もとられていない。同様に、アンタッチャブルはバイタデイのカランガのジャガナート寺院に入ることを禁じられている。彼らはレストランの外に座り、食器類を洗わなければならない。多くの場所で浄化のために散水の慣行も存在する。ミルクやミルク製品は飲食のためにアンタッチャブルには与えられないが、しかし、ギー（ミルク製品）は彼らが触れたとしても穢れることはない。アンタッチャブルの少年や少女は公立学校でさえも差別される。彼らは別の飲用ポットを使わなければならない。彼らはまた触れるとインクが穢れるのでクラスで別々に座らねばならない。たとえば、ダウングラ、トリプラ、スングリ・四（バイタデイ郡）のシヴァ小学校では、アンタッチャブルは、アルミのバケツと水ポット（「ロタ」"Lota"）

を買い、それら子供達のために学校に手渡した。しかし、それらは、タッチャブルが使い、その代わりアンタッチャブルは古いバケツを提供された。シャンカール・ラム・マハールは、バロコット(バイタデイ)のデネシユワール中学校の第八から第十学級まで勉強したが、彼はこの時期学校で水を飲んだことがないと述べた。同じ所で、アンタッチャブルは食べるのにレストランの外で立ち、皿を二回洗わなければならない。別の蛇口があり、低いのは低位カースト用、上方のは上位カースト用である。

この地域では、アンタッチャブルがその名前の真中に「ラム」"Ram"を挿入し、同様にブラーマンやクシャトリアが、それぞれ「プラサド」"Prasad"や「バハドウル Bahadur」/"ドウワジュ Dhwaj"と書くという伝統がある。確認のために、彼らはその市民証明書や土地所有証明書や約束状に、アンタッチャブルの地位(たとえばスナール Sunar、ロハール Lohar、カミ Kami、ドージ Dhoji、ダルジ Darj、ドゥーム Doom、バディ Badi など)を示す姓を使用しなければならない(たとえばナリ・ラム・ロハール、プラタップ・ラム・ロハールなど)。バラコット・六の学校に入学する場合には、ラム・シン・ラワドゥやバスカル・デヴ・ラワドゥは、その名前をラム・ラムやバスカル・ラムとそれぞれ訂正しなければならなかった。

同様に、ゴバル・ラジ・ポウデルはカランガの住人で、「ポウデル」Podel という姓で彼の息子に市民証明書を発行してもらうことを望んだ。しかし、郡主席官マダヴ・ラジ・シャルマはこの姓で証明書を発行することを断った。郡主席官(DDO)はもし「ポウデル」が該当人に用いられるならば、上位カーストのメンバーとまちがえられ、上位カーストの少女と結婚し、紛糾を作り出すかも知れないと論じた。

バイタデイやドージェイやバジャーヤンやバジュラの諸郡では、クマル(ポット作り)はアンタッチャブルのなかで最低のものとして扱われている。しかしながら、アチャーム郡ではクマルはクシャトリアと同等とみられている。

残りの諸郡では彼らはアンタツチャブルではない。

都市地域では、アンタツチャブル用に別のレストランが開いている。いくつかの場所ではレストランがアンタツチャブル用かタツチャブル用かを示すボードを掲げることが義務とされてきた。バイタデイのランガやドーティのディバイヤルで開店した「ビシユワカルマ・ホテル」はこのタイプモデルと考えられうる。最初はビシユワカルマたちだけがこれらのレストランへの入り口を持っていた。しかし、さまざまなカーストのアンタツチャブル達の間の一や統合の増大とともに、彼らのすべてが等しくそこで歓迎されている。

アンタツチャブル・コミュニティそれぞれ自体の内部でのアンタツチャビリテイもまた、アンタツチャブル間の平等性を大きくする運動とともに小さくなりつつある。その結果、古い世代や家庭ではなおアンタツチャビリテイが存続し、お互いの結婚がなお許されないにしても、アンタツチャブル・カーストは共通の祝祭を組織するようになった。アンタツチャブルの間での浄化のための散水の慣行はいまや消失している。

ネパール王国軍内の低い等級で雇われたアンタツチャブルは、兵舎に入ることを許されずそこで一人で住んでいる。彼らは外部で生活し義務を遂行しなければならない。警察業務に限定的に雇われたアンタツチャブルもまた、アンタツチャビリテイを理由に差別を経験しなければならない。ダレンドラ・バハドウル・ラサイリのような例もまた見出されている。彼はバジャーンからディバヤルまでいったが、アンタツチャブル・カーストに属していると言ふ理由で警察のポストに不適合であると宣言された。

この地域では、公的レベルで配布された水栓はアンタツチャブルの居住地では使用されていない。ヘマンタワダ第五区（バジャーン）のバンデルビンディ村では、上位カーストの人々の使用する飲料水パイプのルートが変更された。アンタツチャブル居住区を通過して水が穢れるがゆえにである。その結果、アンタツチャブルの約三〇家族が

蛇口から飲料水を使用することができなくなつた。アンタッチャブルの数は教職では、むしろ限定されている。しかし彼らは屈辱を経験しなければならない。同様に通学する子供達の数もこのコミュニティではとてもわずかであつた。彼らもまた屈辱を受けるからである。アンタッチャブルはあらゆるところで従僕のポストに全体的に不適合だとみなされている。

この地域の若干の村、たとえばロディデヴァル村開発委員会(バイタデー)では、豊かな人々は酔つ払つてダム・コミュニティの評判の歌い手のところに行き、女性や若い女の子による踊りや歌を楽しむ。踊りの得意な成熟した女性は、若い少女におきかえられる。たとえば彼女達がぜんぜん踊り方を知らなくてもである。

アンタッチャブルは寺院に入ることを禁じられる。ナガルジュン村開発委員会(バイタデー)では、サッチャ・ナラヤン・プージャ(ヴィシシュヌ神礼拝)の「ブラサド」¹⁾「Purasad」(男神あるいは女神に提供された食べ物)はこのコミュニティには提供されない。カランガ・一にあるジャガナート寺院の偶像はブル・カーストによって発見されたが、最近ではこれらの人々は寺院に入ることを許されていない。その代わりに別の偶像が違った場所に彼らのために設けられた。公共道路は祭りの間アンタッチャブルにたいしてブロックされている。

バジャーン郡のチャインプル村開発委員会のビスレクおよびダミレクでは、低位カーストの人々は上位カーストの人々の濡れた庭に足を踏み入れたり、その家の壁に触れることを許されていない。彼らが知らないでそうしても、彼らは罰せられるのである。その上、低位カーストの人々はプルニマ Purnima (満月)の後パンチャミ Panchami まで、シユラワン・アーウンシからダミレクまで行くことはできない。犬が低位カーストの人に触れるならば、同じ場所で犬は撒水によって浄化される。リサパダ・四では、サルキは地元のタル・タパ Thalu Thapas の死に際して頭をそらなければならない。コトデヴァルのアウジとヘマンタワダのドーリは上位カースト・コミュニティの死

や生に際して音楽楽器を演奏することを義務づけられている。この伝統はネパールの東部地域でも部分的に存在するとみられる。

以下に記述する出来事はアンタツチャビリティにかんする問題の深刻さを示している。

ーラクシミ・ラム・ブルとカルクテ・ロハールがカランガのラシュトリア銀行に水牛を育てるためのローンを申し込んだ時、銀行支配人（すなわちガネーシユ・ドゥッタ・レカク）はそのミルクは市場で売れないだろうと言つて、そうすることを拒否した。

ーチャンナダラでダマイがめでたい折にダマウを演奏し始めたが、彼らは上位カーストの人々に叱られた。彼らは彼ら（上位カーストの人々）のためにそうしたと言ひ、最終的に救われた。

ーガジェンドラ・ラサイリはバイタディ地稅収入局のプラヤグ・ラージ・ウパディヤヤに一九九三年、彼の証明書の真正コピーであることを証明してもらおうと近づいた。しかし、ウパディヤヤ氏は彼にそれを置くように頼んだ。彼が彼の親戚の死を見守つており、彼に触れることができなかつたからである。

ー上位カーストの人々は、もし興奮して低位カーストの名前を使用するならば、それを大きな犯罪とみなす。たとえば、メラウリ・三（バイタディ）出身のパドゥマ・バハドウル・チャンドは喧嘩でマン・シン・ガルティを「ダム」*dum*と呼んだかどで、コミュニティが決定したとおり五〇〇〇ルピーの罰金を払わなければならなかつた。

ー最近マジ村の上位カーストの人々はビルケシユ・ダマイを叱責した。彼の息子クシ・ラムの花嫁を駕籠に乗せて運んだからである。花嫁を強制的に駕籠から出させ、彼らに五〇〇ルピーの罰金を科した。

ーガイリ・ガオン（バジャーン）のスルマタルという聖地に行く前の一五日は、低位カーストの人々に触れては

いけない。もし触れれば処罰される。この場所は低位カーストの人々には禁止されているが、しかしキリスト教徒やイスラム教徒には開放されている。

—山岳および丘陵地においては、低位カーストの人々はすべてのタイプの店に入ることはできない。彼らは店の外で距離を置いて立って物を買わねばならない。

—アンタッチャブルはダデルドゥラ町のバグバザールで道のまんかに位置するジョギンタナに遠方から歩いてこなければならぬ。

—シルガデイ(ドーテイ)の有名なシャイレシユワリ寺院は低位カーストの人々に開放されていない。彼らは寺院の外側に立つ女神に敬意を払い礼拝しなければならない。

—バジャーン郡のアンタッチャブルは自らの神々を持っている。すなわち、ランガ(ランゴ)、バタワラ(バンタパロ)マサネなど。これらの神々は他のカースト出自の人々には受け入れられない。アンタッチャブルは誰かが死んだ時にほら貝を吹くことを許されない。その代わり彼らは銅のパイプやパイアの果柄を吹く。

—アンタッチャブルは屋外で組織された集會に出席することは許されるが、寺院区域の内部では認められない。もし彼らが集會で演説することが認められる場合は、彼らは寺院地域外側にもつてこられたマイクを使用できる。

—最近アンタッチャブルはマヘンドラ・ナガール・五のスカサルで寺院を建てた。そして内部にシヴァ・ナラヤン神の像を設置することを欲した。しかし、郡主席官や市長を含む上位カーストの人々がそれについて知った時、彼らはアンタッチャブルはシヴァ・ナラヤン神を礼拝すべきではないと言ってそれを阻止した。のちに彼らはヴィシユワカルマの像を設置するために若干の財政的支援を拡大し、そしてまたそれを「ヴィシユワカルマ寺院」と彼らが呼ぶように強制した。現在タッチャブル・カーストの人々はこの寺を訪れることはない。

(写真一葉、シバの代りにおかれたヴィシユワカルマ・ババ、略)

ーラクシミ・スナールとパドゥマ・ビシユワカルマは、どのように上位カーストの人々がその性的欲望を堪能させるために、低位カーストの女性を搾取しそして品性を落とした状態にしているかを例証する例として引用される。カンチャンプル郡のパラサン・八出身のフリシ・ラジ・ジャイシは、ラクシミ・スナールに彼とともに家から抜け出すように説得した。少年の親戚は彼を発見し、低位カーストの女性との結婚は彼の宗教とカーストをけすと彼を説得した。彼らは結局少年を少女から引き離すことに成功し、彼をインドに連れて行って隠した。現在ラクシミ・スナールはどこにも託されていない。同様に、同じ郡のバイセ・ビチャワ・六出身のクリシユナ・バハドゥル・ボーラはパドゥマ・ビシユワカルマに彼とインドに逃げるように説得した。少年の親戚は少女を脅して、チトワンで彼女をビシユワカルマの少年に託した。この少年は少女をボーラのところに連れ戻したが、後者の母親は彼女を打ち、無法にも彼女を家の外に追い出した。結局少女は両親の家に避難するよりほかに選択の道がなかった。法廷でパドゥマは少年と住みたいと請願した。このケースはなおペンディングとなっている。

ーカランガ・二(ダンデルドゥラ)出身のガウル・ダマイの二〇歳の娘のキシヨリ・ダマイは二七歳のアンシング・ダーミに恋され、彼の妻となった。彼女はすでに子供をもうけた。この事実にもかかわらず、地元の正統派社会の圧力のもとに誘拐され、行方不明のままである。

ー牢獄内で獄吏や他の囚人がアンタッチャブルの囚人を差別する実例がいくつか観察されている。この差別は、マヘンドラ・ナガール牢獄では比較的少ないとみられている。この牢獄は現実に七五人の囚人の収容能力があるが、

いまでは一二二人の男性と一人の女性四人で収容過多になっている。そのなかにはカミやダマイやサルキのようなカーストに属するネパールやインドの一八人のアンタッチャブルの囚人がいる。アンタッチャブルは別の台所を与えられているが、彼らは何らの差別なしに同じ台所で食べている。

一九九二—九三年にバジャーン郡で行われた土地調査で、土地は数世代の間それを利用してきた地元のサルキには登録されなかった。その代わり、それは非合法的に地元の首長に登録された。

ハリヤ (耕作男たちの) システム

パンケやバルデイヤや他のいくつかのテライの諸郡では、タルーたちが奴隷的労働者として仕事をすることを余儀なくされているのは、周知の事実である。奴隷的労働というこの慣行は、この発展した丘陵部に起源をもつ。このハリヤシステムは、封建的首長が丘陵部からテライへ移住したときに、かれらによってテライに導入された。かれらはタルー人から土地をひったくり、かれらを奴隷的労働者にした。この事実は、奴隷的労働が丘陵部や山岳部で広く行われていたことを示すものである。それは、バイタデイ、ダンデルドゥラ、バジャーンの諸郡に存在する。丘陵部出身のブラーマンやクシャトリアは田畑を耕すべきでないと言われている。ここでは耕作男たちは通常口ハールやサルキやダマイである。この地域の貧しい低位カーストの人々は、上位カーストの人々からローンを借りなければならぬ。かれらが利息を支払えない場合には、ハリヤとして働かなければならぬ。利息はかれらの賃金から支払われる。加えてかれらはまた現物でいくらか報酬を支払われる。金貸したちはローンの支払いを受け取らず、そしてハリヤは耕作義務を持つのである。もしかれらがそうすることを謝絶する場合には、かれらは悪霊によって妨害されると脅される。こうしてかれらは仕事を続けることを余儀なくされるのである。ハリヤの家族のメ

ンパーもまたその主人の下で働かなければならない。かなり多数の素朴な人々は賃金なしで働かなければならない。ハリヤは一年中穀物を植えるが、お返しにまったくの少量（約六パティ（ネパールの単位）の米と一ドコ（ある種のバスケット）のトウモロコシ）を受け取るだけである。日給で働くこうした人々は、朝食、昼食および四マナ（二kg）の稲を与えられる。植える人は稲の一パティを支払われる。貧しい人々は、子供の結婚やあるいは他の目的での支出を満たすために、かれらの主人のために耕したり他の仕事をしたりするという条件で、ローンを借りる。ローンの利息を支払うために耕す、という慣行も存在する。このような場合は、ローンによる主な元利合計を支払うことは不可能である。その結果、借り手は奴隷的労働者として全生涯を過ごさなければならぬ。低位カーストの人々の約九五%がこの状態を経験している。このシステムにうんざりして、トリブラ・スンダリ（バイタディ郡）出自の老人であるアニラム・タムタは、「耕作以外のすべての種類の仕事をする」と、この苦い経験を表現する。

このシステムはまた西部地域のゴルカにも存在することがわかっている。それは、ある形態あるいは別の形態で、国のあらゆる地域で蔓延していることが観察されている。西部ネパールでは、それは奴隷的労働—経済的に収奪される低位カーストの人々への人権侵犯にいたる暴力的慣行—の形態で存在する。ここでは、経済的にベターであるそれら低位カーストの人々でさえ、上位カーストの人々のために耕作するよう服従させられている。かれらはブラーマンやタクリと論争することさえできない。

ドリ（担ぎかご）システム

ドリ (一人乗りの) 担ぎかご」は、通常辺境西部地域の、ダルチュラ、バジャーン、バージュラ、ドーティ、アチャームや他の丘陵および山岳諸郡で、ロハールやサルキによって運ばれている。この地域では、タルーの花嫁や花婿を担ぎかごで運ぶのが広く行われている慣行である。担ぎかごの運び人は限定された額の賃金を支払われる。もしかれらがそうすることを拒むならば、かれらは非難され脅され、市場を訪れたり水を使用したりすることを禁じられる。かれらはぶたれて担ぎかごを運ぶことを強制されたりさえする。無知から、かれらは担ぎかごを運ばなければ、かれらの神が不愉快になり、難儀をこうむらねばならぬだろうと考える。馬の背でアクセスできる場所に到着してさえも、いわゆる上位者は、そのプライドと見せびらかしのために担ぎかごで旅するのである。

ジャリ (姦通) システム

だれか他人の妻と結婚する慣行はジャリ・システムと呼ばれる。このような行為のために支払われる罰の金額はジャリと呼ばれる。このシステムは疑いもなく国中に存在する。しかしながら、辺境西部地域では、かなり異なった様式で発展し、重大な問題として提示されている。ブラーマンとクシャトリアのコミュニティでは、この問題は例外的と見られているが、他方低位カーストでは一般的に行われている現象である。

ダン・カーネ/チャングラ (持参金) システム

国中で低位カーストの人々は伝統的に結婚で娘を与える一方、花婿の両親から財を要求するのが通例だった。今ではこの慣習は国の他の部分で若干の人々によってのみ続けられている。しかしながら、辺境西部地域ではなお広範に行われている。結婚の出費あるいはその他を満すために花婿の両親から財を要求することは、悲惨な財政状

況の結果である。

(以下
次号)